

忙 中 閑

先日、中国で開催された人型ロボットの競技大会で、ロボットが100メートルを8秒台で走ったというニュースを目にした。ウサイン・ボルト氏が持つ男子100メートルの世界記録9秒58を上回るタイムである。中国では、人型ロボットをAI活用のための重要なプラットフォームと位置付け、国家を挙げて開発を進めているという。驚くことに、昨年と同大会の優勝記録は21秒台だったそうで、わずか1年でその記録は大幅に短縮された。その開発スピードには目を見張るものがある。一方、世界初の本格的な人型ロボットとされる「WABOT-1」が早稲田大学で開発されたのは1973年。当時は一歩進むのに約45秒

を要したという。それから半世紀余り。ロボットは歩くどころか、人間より速く走るようになったのだ。

生成AIの進歩にも、同じような驚きを感じる。数年前には、もっともらしく間違った回答をすることもしばしばであったが、現在では医学論文を検索し、要約し、さらにはスライドにまとめるところまで手伝ってくれる。その進歩の速さには、人型ロボットの開発と同様、驚かされるばかりである。

ところで、100メートル走のニュースには続きがあった。猛スピードでゴールしたロボットは、うまく止まることができず、そのまま防護柵に突っ込んでしまったので

走るロボット、立ち止まる人間

前広報委員 林 義人

ある。「走る」ことでは人間を超えても、「止まる」ことはまだ苦手なようだ。

振り返れば、医療の世界でも時間の感覚は大きく変わった。電子カルテ、スマートフォン、オンライン会議、そしてAI。私が学生の頃には図書館に赴き、長い時間をかけて調べていたことが、今では数分で手に入る。メールは瞬時に届き、どこにいても仕事ができる。便利になれば時間に余裕が生まれるはずなのに、不思議なことに、以前より忙しくなったように感じる。速く走れるようになった分だけ、さらに遠くまで走ることを求められているのかもしれない。

AIが画像を診断し、膨大な医学情報か

ら治療法を提案する時代がすでに訪れている。それでも、医療の本質は変わらないと思う。患者さんの人生に寄り添う診療では、速さや数字だけが大事なことはない。時には一緒に立ち止まり、話を聞き、迷いながら一緒に考えることが必要である。

このコラムの名前は「忙中閑」である。忙しく走り続ける毎日の中に、ほんの少しでも立ち止まる時間を作る。人間より速く走るロボットを見ながら、医師にとって大切なのは、もっと速く走るのではなく、必要な時に上手に立ち止まることなのかもしれないと思った。